新春対談

幸福を分かち合うまち 幸福実感都市あらかわを目指して

平成29年の新春区長対談は、東京大学名誉教授・神野直彦氏と西川区長が、荒川区が他の自治体に先駆けて進めてきた「区民の幸福実感の向上」について、基礎自治体としての区が果たしていく役割について語り合いました。

東京大学名誉教授 神野直彦氏

「荒川区に住んでよかった」と思えるまちづくりを

司会　平成28年11月に、区長として４期目（13年目）をスタートされた西川区長は、「区民の幸福実感」について、どのような思いをお持ちでしょうか。

区長　「治安がとてもよい」とか「子育てがしやすい」というふうに、年代によって異なるさまざまなご要望に、可能な限り高いレベルの行政サービスでお応えする、それが私たちの基本的な役割だと思っています。

区民の幸福実感の向上に取り組むきっかけは、東京大学名誉教授の月尾嘉男先生から、ブータン王国の国民総幸福量についてご教授いただいたことです。ブータンでは、人と人とのつながりや思いやりなどを提唱しており、これを日本の社会に適用できたらと考え、**荒川区民総幸福度**※1に取り組んで参りました。「荒川区に住んでよかった」と思っていただくことが、区民の皆さんの幸せの原点になるという思いで、今年もより一層取り組んで参ります。

神野氏　幸福というのは、人間が生きていくうえでの究極の目的ですよね。人間には、何かを所有したいという「所有欲求」と、人間と人間とが調和したいという「存在欲求」の２つの欲求があると言われています。所有欲求が充足されると、私たちは豊かさを実感でき、触れ合いたいとか愛し合いたいという存在欲求が充足されると、私たちは幸福を実感するんです。

今までは、存在欲求を犠牲にして、物の豊かさを求めて所有欲求を満たそうとしてきた社会だったと言っていいだろうと思います。ところが、国民の世論調査でも、心の豊かさの方が物の豊かさよりも重要という考え方が、増えているんです。

区長　幸福には分かち合いと助け合いが重要ですが、犯罪や交通事故が多くては、なかなか幸せを感じることは難しいと思います。荒川区は都内でも犯罪が少なく、治安がよいまちと言われています。これを維持していくには、区民の皆さんにご理解をいただかなければなりません。地域社会を担っていただいている方の意見を真摯（しんし）に受け止め、真剣に取り組んでいく姿勢が大事だと思っています。

また、荒川区では、区民の幸福実感の向上のために、特に子育て施策に力を入れてきました。待機児童対策のため、公園内に保育所を建設するのもその一つです。これは、**国家戦略特区**※2という手法を国にお願いして、内閣総理大臣から日本で初めて認可をいただき行っているもので、公園の中に保育園をつくっています。また、児童相談所の都から区への移管にも取り組んでいます。

神野氏　新しい試みをやろうとすると、日本の場合にはさまざまな規制や、既存の法律などがあり、簡単ではありません。西川区長は、なるべく住民の身近なところで意思決定ができるように、住民に最も身近な自治体である区に権限を移してもらうなど、手続き上の努力を着実に進めながらやられている。そして、さまざまな住民が、それぞれのよさを失わないようにしながら一つにまとめていこうということに心を砕かれていると思うんです。そういうことを背景にしながら、次の荒川区を担っていく人々が、お互いに学び合っていくことで、「自分たちは生まれも育ちも違うけれども同じ仲間なんだ」と仲間意識を養うような形で、政策を進められていると思います。それは防災や防犯の際の重要な安全装置にもなります。安全というのは物理的な手段によってカバーできるものですが、安心というのは、自分が困ったときに誰かが助けにきてくれる、つまり、人と人とのつながりが大切になってきますよね。

区長　防災のお話が出ましたが、区の中学校防災部では、中学生が消防団の皆さんから指導を受けながら、川から水を取り、立派に放水訓練を行っています。東日本大震災を経験した釜石市の中学生と意見交換会をするなど、いつくるかわからない災害に備えて、自主的に運営してくれています。こういったことが、先ほど神野先生がおっしゃった安全・安心につながっていくのだと思います。

「幸せリーグ」の設立

区長　平成25年に、ほかの自治体とも連携して幸せを追求しようということで、**幸せリーグ**※3を設立しました。この幸せリーグは、当初52の基礎自治体の連合体として発足しましたが、現在はおよそ100もの自治体が加入しています。特別区長会における全国連携プロジェクトとともに、地方と東京がともに持続的に発展できる関係を目指しています。

神野氏　幸せリーグの意義は、歴史的に非常に重要だと思います。幸福度によって政治を運営する動きは、フランスやイギリスなど世界的に行われているのですが、ほかの国の場合、政府が音頭をとって下部の行政組織に落とすというやり方で、ほとんど跡が残っていません。

西川区長の発想は、最も身近な公共空間である地方自治体で幸福づくりをやっていく試みで、私はこちらのほうが地に足がついた、着実な動きができると思います。それと同時に、志を同じくするような地方自治体に声をかけて、全国的な組織づくりを始めたことは、お互いに交流しながら高め合っていくことや、相互に協力し合って進めていくという意味でも、人間の未来にとって非常に重要なことなのではないかと思います。

区政は区民を幸せにするシステム

神野氏　西川区長は、区民のためということを重視して区政を運営されていると同時に、区民を信じているんですね。地域力という概念も区長はつくられていますが、これは住民の力なんです。住民の個人の力と結集力が地域力であり、それが荒川区にはあるということを前提としたうえで、それをより伸ばしていこうとされていると思います。荒川区の商店街に行くと、会話の量がすごく多いんですね。これも地域力のひとつの表れであり、問題解決のための最も重要な力だと思います。住民の方にも誇りを持って、幸福実感の向上を目指す区政に参加していただければと思います。

区長　今日は、私たちが運営している区政の基本的な精神・思いを、神野先生に太鼓判を押していただき、大変うれしく思います。

アメリカ合衆国のリンカーン大統領は、「government of the people, by the people, for the people」と述べましたが、この「区民の区民による区民のための区政」という言葉と、荒川区のドメイン（事業領域）である「区政は区民を幸せにするシステム」を職員一同が心におき、しっかりした区政運営にまい進していきたいと思います。

本年もよろしくお願いいたします。

プロフィール

神野　直彦（じんの・なおひこ）

埼玉県さいたま市在住。昭和44年東京大学経済学部卒業。昭和53年同大学大学院経済学研究科修士課程を修了し、同大学経済学部教授、同大学大学院経済学研究科教授を経て、現在、東京大学名誉教授。平成20年10月～28年１月、国の地方財政審議会会長を務める。専攻は、財政学・地方財政論。

主な著書は、『脱「格差社会」への戦略』『「分かち合い」の経済学』『「人間国家」への改革』等。平成21年に紫綬褒章を受章。

▲対談は終始和やかな雰囲気で行われました（右は司会のケーブルテレビ・櫻井アナウンサー）

メモ

※1　荒川区民総幸福度（Gross Arakawa Happiness：GAH）

幸福実感の度合いを測る指標を作成し、アンケート調査による測定と結果の分析により、区民の幸福実感が向上するような区政運営につなげる取り組み。公益財団法人荒川区自治総合研究所が研究テーマとして取り組み、区に提言を行っている。

※2　国家戦略特区

産業の国際競争力の強化や、国際的な経済活動の拠点の形成を促進する観点から、規制改革等の施策を集中的に推進する、国が定めた区域。今回、荒川区が国から認定を受けた特区は、都市公園法で認められていない都市公園内への保育所の設置を地域限定で認めるもの。

※3　幸せリーグ

「住民の幸福実感向上を目指す基礎自治体連合」の通称。住民の幸福の追求という共通の使命のもと、志を同じくする基礎自治体が相互に学び合うことを通じて、誰もが幸福を実感できるあたたかい地域社会を築いていくことを目的に、平成25年６月５日に設立。設立当初から西川区長が会長を務めている。

ケーブルテレビ（地デジ11ch）「こんにちは荒川区」の新春特別番組で、神野直彦氏と西川区長の対談を放送します（詳細は、4面参照）